

語り手における昔話の変容

——土田賢姫の「どや昔」の場合——

杉 浦 邦 子

はじめに

一人の語り手から同じ昔話を、何度も聞く場合、文字テキストがある語り芸や、師匠から弟子へ口移しで伝えられる芸能とは異なり、昔語りが、一字一句の違ひなく、コピーのよう再現されることはほとんどないであろう。それでも、聞いている者にとっては、自分の知っているあの昔話であるのはまぎれもない事実である。語り手は、自分は聞いたとおりに語っていると言ふだろうし、聞き手は、またあの話を聞けてよかったですと思うだろう。好きな人から好きな話を何度も聞かせてもらうのは、聞き手にとっては喜びである。

幸いにも、筆者はある優れた語り手から、同じ昔話を繰り返し聞く機会を得た。初めて聞いた時には心を揺すぶられ、聞く度に満足感を与える一方で、同じ昔話なのに、どこか違う印象を感じることがあった。いわば成長していると言つたら当

たつているだろうか。本質は変わらないのに、外形には変容が見られると、言おうか。

それを検証してみたいと思う。

土田賢姫のこと

土田賢姫（一九二四年一月一八日生）は、山形県最上郡真室川町大字川ノ内斎藤庄左右衛門家（屋号）に生まれた。十二、三歳頃より、生家の縁続きであり、叔父が住職を勤める正源寺で暮らした。因みにこの叔父・鮭延瑞鳳師は『昔話研究』（第二卷四号、一九三六年八月）に同町の昔話四話を報告するなど、昔話や口演童話に関心を持ち、話術の巧みな人であったという。賢姫は十九歳で、同町大字野々村の土田家に嫁ぎ、四人の子どもを育て、家業である農業と酪農に励み、現在まで同地に暮らしている。

昔話は、数え年七、八歳の頃、主に父親から聞いたが、今回

取り上げる「どや昔」は、叔父の瑞鳳師から聞いたものという。

一九九三年、真室川町教育委員会編纂の昔話集にとりあげる語り手を探していた編集委員に見出されてから、積極的に語り始めた。同町には民話の好きなお年寄りたちで作る「真室川民話の会」（一九九五年「真室川伝承の会」として発足、九七年改称）があるが、現在はその会員として活躍している。小学校の子どもたちや仲間どうし、また都会から昔話を聞きたくて訪れる人たちに昔語りをするのを楽しみにしている。

姫は昔語りに対するしつかりした考えを持っており、それを自分自身の言葉で表現できる人である。

「おんなじ昔でもほっちはほっちで教えられたように覚えてるべし、こつちはこつちで教えられたように覚えてるべし」と子どもの頃に聞いた記憶に対する自信、我が家に伝えられた昔話への自負に支えられた発言であるといえよう。

姫はまた、昔話なんてこばかくせえと思っているわらしたちに向かって、次のように言つたという。

「おれの昔語りは本物だあはげな、昔の昔の、もつとあつちの昔の遠いとこの、いつかの昔の、鉛筆も紙もねえとぎ□から耳、耳から口つて、たつと伝わった昔だけ、おれのは本物だけ、ずほ（嘘）でねえぞ」（傍占筆者）

そう言い切つたからには、語り手としての力量が問われるところになる。いつでもどこでも同じ調子で語つては聞き手を惹きつけられないことを知る姫は、続けて言う。

「おれ家で語つたときと、（大勢を前にして）調子さ乘つて語るときと、ずほ語つてしまへるときとあるんだし。わらしたち喜ばせたいために語るもんだけな」

言葉の文芸である昔語りの本質を突いた謂いであると思う。加えて、ずほを語つて、それを本物だと思わせるには、その人の日常生活の言動が信用されるものでなければならないが、姫の生活態度は、地域の人から信頼されるに足るものであり、その働き振りからは一目置かれた存在である。

そして、姫の語り口は、町のお年寄りたちをして、「ほんとの昔語りだ」と言わしめるほど古態を留めている。

「どや昔」について

筆者は、一九九三年一月二三日の夜、町内の病院に入院中の賢姫に初めて対面し、その場で四話の昔話を聞かせていただいた。中でも圧巻は「どや昔」（大成四〇一）という、いかにも姫らしく、まことに「おもっしゃくて、おつかねくて“聞き手を惹きつけて離さぬ語りであつた。その後、姫自身も叔父から伝えられたかけがえのない、独自の持ち話という自覚を持つに至る昔話であった。

この話はかなり長いので、梗概を記す。

a 昔、ある所に、どや（鑄掛け屋）を商売にしている仲の良い夫婦がいた。

j それから、五月の節句には、菖蒲と蓬を屋根に刺すようになつた。

b 夫婦は、どちらが先に死んでも、投げない（家から外に出さない）でおこうと約束をする。

c やがて、婆が先に死ぬ。爺は約束なので、婆を仏様（仏壇）に入れて飾つておいた。

d そのうち、婆の体は膨れて、腐りはじめた。膨れて体の大きくなつた婆は、空腹を訴えるようになり、「ごてどのよう一お、ごてどのよう」と、叫ぶので爺は困り果てる。

e 折良く、そこに、女の客が鍋の修理を頼みに来たので、

爺はこの機会を利用して逃げ出そうと考えた。そこで、自分は鍋の修理をするので、代わりに仏様にご飯を供えてくれと頼む。

f 爺は急いで逃げ出す。ご飯を持つて行つた女は、化け物になつた婆を見て、仰天する。

g 婆は仏壇から降りて来て、ご飯を食べると、爺を探す。爺が逃げ出したことに気づいた婆は、爺の名を呼びながら、空を飛んで追いかける。

h 必死で逃げていく爺は、菖蒲と蓬の生えている所を見つけて、その中に隠れる。

i 婆は、爺を見つけるが、菖蒲と蓬の中に入ると、自分の体が溶けてしまうと言つて、その上を旋回している。その時、大風が吹いて、婆を吹き飛ばしてしまう。

筆者は、初めて「どや昔」を聞いて以来、ほとんど毎年のようにこの語りを聞く機会に恵まれた。「真室川民話の会」と、昔語りの研究と実践を目的とするグループ「ふきのとう」（一九九二年発足、杉浦主宰）は、たびたび交流会を重ねてきたが、そんな折りには、必ずといってよいほどこの昔話を語つてもらつた。また、少人数で聞かせていただいたこともあつた。聞く楽しさを満喫しながらも、この昔話の面白さ・怖ろしさ・凄みが、一様ではないのを感じた。

何故に同じではないのだろうか。それを考へるために、語りの行われた時と場所と聞き手の違いを見てみよう。実際に、語りの内容が変わつたのかどうか、もし変わつたのならどのように変容したのかを考へてみたい。

語られた時と場所と聞き手

土田賢姫が「どや昔」を語った時と場所と、誰が聞き手であったかを整理したのが表①である。表中、聞き手の欄には、聞き手の人数と居住地域（交流会の場合は会の名称）を記した。姫と同じ生活語を遣う聞き手か、共通語を遣つている聞き手かをはつきりさせるためである。所要時間は、カセットテープレ

コーダーの録音を再生した数値なので、正確とはいえないが、

語りに要した時間を比較するために記した。

表①「どや昔」の語られた時と場所と聞き手及び語りに要した時間

	時	場所	聞き手	所要時間
一回目	93・11・23夜	入院中の病室	三名 (真室川町在住・出身者各1・杉浦)	八分
二回目	94・3・12昼	町立ふるさと伝承館 (心のふるさと民話の集い)	約五十名 (真室川民話の会30・ふきのとう20)	八分
三回目	95・2・25夜	宿屋の和室 (夕食に続く歓談の席)	約二十五名 (地域の人たち9・ふきのとう16)	十五分半
四回目	95年春	自宅で本人によるテープ吹き込み	なし	十五分
五回目	96・5・26昼	交流会宿舎の研修室 (語りを聞く時間)	約六十名 (真室川民話の会20・ふきのとう40)	十八分以上 (二十分余り)
六回目	97・4・6昼	新田小太郎氏宅 (役場職員によるビデオ収録)	四名 (新田氏夫妻・生涯学習課長・杉浦)	十八分
七回目	98・3・16昼	土田賢姫宅 (地域の人たち5・杉浦と友人2)	八名 (新田氏夫妻・生涯学習課長・杉浦)	十四分

時と場所と聞き手は、昔話の変容をみる上で重要な要因であると思うので、以下、各回の状況を説明する。

初めて「どや昔」を聞いたのは、姫が入院中の病院内であったことは、先に述べた。『真室川町の昔話』(注1)の編集委員であり、同町の昔話の継承発展に力を尽くしていた新田小太郎

氏を見舞いに行つた筆者は、同町出身の昔話研究者であり、同誌の編集委員でもある野村敬子氏から賢姫を紹介されたのであつた。新田氏が土田賢姫を見つけだし、野村氏は姫が昔話の語り手として類稀な資質の持ち主であることを即座に見抜いた方である。

この時、賢姫は恥ずかしそうに、幾分はにかみながら語つてくださった。同座のお二人は、すでによく知っている話である上、「五月の節句の菖蒲と蓬の話か」と言つて、語り始めたせいか、じ段については語られなかつた。

しかし、六〇年ほど以前に聞いて、記憶されていたものが、身体の深いところから引き出され、声に乗つて蘇つた昔話は、その時すでに基本的には、必要な要素を整えていた。

この時の筆者の印象は、姫の言葉の力に圧倒されたというに尽きる。姫の声は姫一人のものではなく、遠い昔から語り継いできた人々の魂を抱え込んで、力強い響きとなつていると感じた。

二度目、一九九四年三月一二日の午後に聞いたのは、町立「ふるさと伝承館」で行われた「心のふるさと民話の集い」（真室川町教育委員会と商工会青年部・婦人部主催）においてである。

聞きたくて首都圏から参加した「ふきのとう」のメンバーたち——共通語を遣う人々——、合わせて五十名以上であつた。三回目は、一九九五年二月二四日から二泊三日で「真室川民話の会」と「ふきのとう」との交流会を行つたが、二日目の夜のくつろいだ座で聞いた。「ふきのとう」の宿舎を訪ねて集つた地域の人たちと夕食を囲んだ後、いささかお酒も入つて、民謡なども歌おうという頃、筆者が乞うて語つてもらった。この時は、賢姫も、自分が持つてゐるかけがえのない持ち話という自覚が十分にできていて、野村敬子氏との出会いと励ましたについての話をしてから、語り始めた。聞き手の中には、かなり酔いが回つてゐる人もいたが、だんだんに引き込まれていき、最後に「母ちゃん、語り方、^{じよせ}上手だつ」と、褒め言葉が飛び出した。この時は、姫も、聞き手を驚かせてやろう、怖がらせてやろうという意識が働いていた、と思う。

四回目は、姫自身がテーブに吹き込んで、送つてもらつたものである。前回から一、二ヶ月たつた頃と記憶するが、正確な日時は定かではない。ただ、姫が語り手としての自覚を持ち、自分の昔語りを残しておきたいという意志の現れとみた。しかし、この時のテープから聞こえてくる声は、姫らしい元気のよさも張りもなく、筋を追い、婆が化け物になつていく気味の悪さが強く感じられた。語りの醍醐味が感じられないのは、姫が一間に籠もつて、いつものような人間の聞き手ではなく、もの言わぬ録音器にひつそりと向かつていてからであろう。聞き手には、昔語りの好きな人たちが集まつていた。生活語を同じくする、換言すれば、同じ方言を遣う人たちと、昔話を語つた。

聞き手には、昔語りの好きな人たちが集まつていた。生活語を同じくする、換言すれば、同じ方言を遣う人たちと、昔話を

が語り手に与える影響を考える参考として提示した。

「真室川民話の会」と「ふきのとう」は、一九九六年五月二六日から一泊二日の研修交流会を埼玉県寄居の宿舎で行つた。

五回目は、その時の最初のプログラム、双方の語り手たち数人による語りを聞く集いの中で聞いた。「真室川民話の会」の人たちは、民謡や踊りなど民俗芸能をふきのとうの仲間たちに見せようと思欲満々でこの交流会に臨み、バス旅行中も大いに盛り上がつていたという。会が始まる前から、真室川町の語り手たちは皆意氣盛んであつた。都会の聞き手を喜ばせてやろう、自分の昔語りの世界に引つ張り込んでやろう、という気負いがあつたとしても不思議ではない。そんな雰囲気の中、期待に満ちた眼差しを向けられた姫は、それに応えるべく、聞き手を笑わせ、怖がらせ、話はどんどん長くなつていった。

五回目、一九九七年四月六日は、新田小太郎氏のお宅で、新田氏夫妻と共に、昔語りのビデオ撮りの場に立ち会つて聞いた時のものである。昔語りをビデオに収録して、記録する試みが、町役場で進められているが、その一環として行われた。聞き手は、ビデオを撮つている生涯学習課の課長と語り手でもある新田夫妻と筆者で、姫も少し緊張気味であつたかと思う。これを伝えねばという使命感のようなものがあつたかもしれない。

最後は、一九九八年三月一六日の午後。この朝、残雪の美しい景色を眺めながら、筆者と友人一人は、賢姫のお宅を訪ねた。民話の会の仲間たち五名も集まつて、昼食のもてなしをいただ

き、和やかな雰囲気のうちに幾つかの昔話を聞いた。そのうちの一つが「どや昔」であつた。時も場所も聞き手も申し分ないこの時の語りは、五年前に賢姫が語り始めてより、幾度となく語つてきて、たどり着いた、全き姿ではなかつたかと思う。ここで、指摘しておきたいのは、聞き手はいつも数人以上いたこと、そして、同じ生活語圏の親しい人が、座に連なつていたこと、ということである。常に、相槌を打ちながら聞く雰囲気があつた。

以上、語りの時と場と聞き手について説明し、ときどきの語りの特徴を簡単に述べた。

次に、各語りについて、実際にどのような変容があつたかをみよう。

語りの変容

一 時間的長さ

それぞれの語りに要した時間については、一・二回目と比べて、五回目以降は二倍或いはそれ以上に延びている(表①参照)。五回目の録音は、途中で切れてしまつたが、おそらく三十分強かかっていると推定できるので、四倍ということになる。先に述べた事情を考慮しても、長い。姫の昔語りは、興が乗つてくるとが長くなりがちで、この時の交流会の夜語りの場でも、姫の「安達ヶ原の山姥(牛方山姥)」の語りがいつまでもいつま

でも続き、係りの気をもませたが、聞いている人たちは、時間のたつのも意に介さず聞き惚れていたことを付け加えておきたい。とは言え、五回目は、特別に長く、資料も不十分なので、これは省いて検討する。

梗概 a 段から j 段について、一回目から七回目までのそれぞれの語りで、どれほどの時間をかけて語られているかを調べて

表②「どや昔」の構成比とキーワードなど

三回目	二回目	一回目	（構成） 段落
15%	13%	11%	起 a b
1:30	0:30	0:41	
38%	51%	43%	承 c
A (2)	B (1) A (2)	A (2) 1:13	d
A (1)	B (1)	B (1) A (1)	e
30%	26%	32%	転 f
A (1)			g
2:40	C (1) 1:08	A (2) 1:04	h
17%	10%	8%	結 i j
A (2) 1:13	A (1) 0:21	A (1) ナシ	
A (6)	C (1) B (2) A (3)	B (1) A (6)	合計

みると、a・d・g・j の各段落において、初めの一回とそれ以降でその違いが目立つ（表②参照）。一・二回目と三回目以降では、a 段を語るのに、一回目、二回目が、それぞれ約四十秒と三十秒であるのに対し、三回目以降は一分十秒から一分三十秒もかかっている。五回目はあまりに長いので省く。（以下同様）

* * * 段落小文字のアルファベットは、梗概の横段の数字の単位は、分・秒
 * まる数字はA・B・Cの語句が語られた回数。
 C B A || ||
 || || a · d · g · j の横段の数字の単位は、「ごてど」のよう

「ごてど」の、「ここいだ。トツカフツカ トツカフツカ」

七回目	六回目	五回目	四回目
15% 1:16	17% 1:26	2:30 （途中）	12% 1:10
33% A ① B ① 2:32	33% A ④ B ① 3:41	までため割合 B ① A ② 半 4:56	36% A ① 3:21
30% A ① C ② A ① 2:18	30% C ③ A ③ 3:09	出せず C ② A ③ 3:06以上	32% A ① C ③ A ① 2:10
21% A ② 2:02	20% A ① 2:57		20% A ② 1:40
C ② B ① A ⑤	C ③ A ⑧		C ③ A ⑤

べたが、右に上げた語は、決まり文句ではない。「どや昔」を聞いた者が忘れるとのできない言葉、いわば、この昔話のキーワードについて触れたい。婆（妻）が愛する爺（夫）を呼ぶ「ごてどの」であるが、死んだ婆が仏壇の中から、「ごてどのよう一お、ごてどのよう」（A）と呼ぶ語である。ご亭主の意であるという人もあるが、今では遣われなくなつた語なので、賢姫も、時に応じて、「今なら、爺つつあといふところだが、そのころは親父のことをしてごてどのと言つた」と、説明をすることもある。

これに答えて、初めのうちは、爺も優しく、輔を吹きながら、婆「ごてどのようお、ごてどのよう」爺「ごてどの ここいだ、トッカフツカ トッカフツカ」（B）と、応じる場面がある。

さらには、仏壇から降りてきた婆が、布団を探しては、「これもおらえのごてどのんねえ」（C）と、爺を探す、淒みのある言葉である。今、便宜上 A・B・C と記号を付した三例をこの昔話におけるキーワードと考えたい。これらキーワードが、どこで、どのように遣わされているかを、表②に記した。A は d 段に、C は g 段に頻出している。B は d・e 段で遣われている。さて、A の「ごてどのよう一お、ごてどのよう」は、大変印象的な言葉で、聞く者は「どや昔」と言う題名よりも、「ごてどのよう」の語で記憶するのではないかと考えられる。事実、この昔話を指してそのように言う人もいる。

筆者も、この語を強く記憶していたので、この語が多用される結果、時間が長くなつたのではないかと思つていた。ところが、子細に検討してみると、このキーワード A が何度も遣われたというより、「ビガビガ」とか「ダラダラ」という修飾語を併用することで、聞き手への印象をより効果的にしていることが分かつた。何度も語つても変わらないキーワード（決まり文句）と、時に応じて遣い分けられる修飾語とを併用することによって、両者の相乗効果が出てくるようだ。

ところで、「ごてどの」には化け物になつた婆の怖ろしい呼び声というイメージと、夫を呼ぶ妻の愛情、もつと言えば甘えのような響きがある。それは、姫がこの語の説明をするときに「ええ言葉だつたべぢやなや」と言つていることからも知れる。特に、B の爺の相槌のような応答にはほのぼのとした暖かなやりとりは、三・四回目では消え、五回目と七回目で再び現れる。

対照的に C は、ひたすらぞつとする表現であるが、四回目以降になつて繰り返されるようになる。一回目と三回目には出でこないで、二回目に一度だけ言われるが、この時、遣われている文脈の中では怖いという印象はない。

思うに、何度も語つているうちに、「どや昔」を聞きたがる聞き手を、怖がらせてやろうという気持ちが出てきた現れではないだろうか。「ごてどのよう一お」という言葉にも「これも、

おらえのごてどのんねえ」という言葉にも、一種の淒みが感じられるが、聞き手は怖がりながらも、それを喜んでいるようないどころがある。

蛇足はあるが、筆者も時折、子どもたちに怖い話をすることがあるが、聞き手が怖がってくれるのは、語り手にとつての快感であることを告白しておく。

一方、怖がらせるだけが昔語りではないことを心得ている姫は、聞き手の笑いを誘うような配慮もしている。e段で、穴のあいた鍋を持ってきた客が気がつかないうちに、センヅチ（才槌）で叩いて穴を大きくするところでは、聞き手は必ず笑う。また、聞き手に問いかけたり、問答しながら、自分を引き合いに出して笑わせる。笑わせるというのは、聞き手に媚びるのでなく、聞き手の気持ちを解放させるものだから、怖い話をする時にはあらまほしき心遣いと言つてもよいのではないだろうか。

以上、昔語りの文芸的な面における変容をみたが、j段におけるそれは、性質を異にしている。次にそれをみよう。

IV 民俗的事象を語り継ぐ

j段は、一回目では語られなかつたことは先に触れた。二回目でも簡潔な表現で説いているので、わずかな時間しかかけていない。それが、三回目からは、この昔話から導かれる年中行事への言及、死者の弔いや仏の供養についての説明がされるよ

うになつた。語り手としての姫も、この時点頃までは、乞われるままに語つたままで、他に類のないかけがえのない自分だけの昔話という意識は持つていなかつたと思われる。それが、三回目の九五年の春には、はつきりと意識して語るようになつていることは先にも触れた。それにつれて、j段で、民俗的な教えともいうべき事柄が丁寧に語られるようになつた。次のように具合である。

三回目、「五月の節句には、菖蒲と蓬とシオデツコ（山菜の一種）と芋の蔓を抱き合わせて、お膳に上げ、『ええごど聞け、ええごど聞け。えぐねえごど聞かねえで、ええごど聞け』と言つた」

四回目、「いくら大切な人でも、死んだら家の中にいつまでも置いてはいけない、化け物になつてしまふから。五月の節句には、化け物が家の中に入つてこられないように、菖蒲と蓬を家の周りに刺すようになった。そして、仏様には必ずご飯や何かを上げるようになった」

六回目、「いくら仲のよい夫婦でも死んだら焼くか埋めるかしなくてはならない。そして、仏様は家の者を守つてくださるのでいつも何か供えておかなければならぬ。五月の節句には、化け物が家の中に入らないように、菖蒲と蓬を軒端に刺すようになった」

七回目、「いくら仲のよい夫婦でも死んだら、いつまでも家の中に置くなどという約束はするものではない。そして、

五月の節句には、化け物が家の中に入らないように、菖蒲と蓬を軒端に刺すようになった。誰でも死んだら、一二、三日で葬式をするようになった。仏様には美味しいものを上げるようになつた。」

四回目以降は、命助かつた爺が村の人たちに自分の体験を話したので、その後こうするようになつたと説く。自分の生い立ちを振り返つて使命感を持つに至つたのか、叔父の教えを思い出して伝えておきたいと思うようになつたのかは知らない。しかし、内容が揺れ動きながらも、年中行事と仏を祀るという教えに至る過程をみれば、語り残そうという意志が働いているのは間違いない。

▽「どや昔」の起承転結

昔話全体を起承転結に分けて、四つの部分を語るのに要する時間の割合を調べてみると、表(2)の各欄上の数字になる。

あえて大づかみに言えば、一・二回目の起部は約一割、承部は四・五割、転部は三割前後、結部も一割ほどである。

三回目以降は、起部はおおよそ一割五分、承部には約三割五分、転部には三割、結部に二割ほどの時間配分で語つてある。最初の二回を三回目以降と比較すると、結部が少なく、その分承部の割合が大きいといえる。しかし、一・二回目は一話の語りに要する時間が短い上、民俗的事象の語りがほとんどない点を考慮に入れると、次のように言えるのではないか。

「どや昔」一話の構成を、起承転結に分けてみた場合、それが毎回、ほぼ同じ割合で語られてるので、繰り返し聞く者にとつては、安定感、安心感があるだろうと。

また、キーワードを遣うべきところでは、いつも同じ調子で用い、キーワードの効果を上げる為の言葉は、その都度状況に応じた遣い分けをして臨場感を盛り上げている。その結果聞き手は聞く度に引き込まれて聞き惚れる。嫗の口から紡ぎ出される言葉を待ち受けて、怖がつたり面白がつたりすることを喜ぶのである。

終わりに

筆者が、初めて賢嫗の語る「どや昔」を聞いてから四年半あまりの間に、語りの内容はどんどん膨らみ、やがて形を整えて、一つの到達点に至つたようだ。

初めは八分で語られた同じ話が、数年後には十四分かけて語られてはいるが、骨子は変化していない。肉付けされ、化粧を施されたといつてもよいかと思う。そうさせたのは、語り手の技量に加えて、聞きたいと待ちかまえている聞き手の期待を、語り手が敏感に感じ取り、聞き手の気持ちに応えた結果であるとも言えるのではないだろうか。

聞き手がある昔語りを聞き、強烈に感じたことを語り手に伝える。それを受け止めた語り手は、聞き手が感じ取ったものを

肥やしにして語りを膨らませて、再度語る。聞き手の共感や好意的反応は、語り手における昔語りの変容を促し、更に語りを深め豊かにさせる。このような繰り返しの末に、やがて、一つの完成に至るのではないだろうか。

(注)

1 真室川町の昔話編集委員会編。真室川町教育委員会発行。
全六巻。一九九一年～九三年。

2 媚は「どてだの」と記憶していて、三回目頃まではそう言っていた。その後、正しくは「ごてどの」と気づいて、言い換えていた。どちらにしても、この語に込められた思いと響きや□調は変わらない。

(付記) 二〇〇一年度日本□承文芸学会大会での研究発表では、岐阜県揖斐郡旧徳山村(現在岐阜市在住)の増山たづ子媚の「蛇媚入り」についても触れたが、紙数の都合上、言及できなかつた。多くの点で、土田賢媚とは対照的な語り手、増山たづ子媚に関する研究は、今後の課題としたい。

(すがうら・くにこ／民話と文学の会)